

# U2 2017 'Joshua Tree' Tour

("FOH on-line" Written by Kevin M. Mitchell)

アルバム Joshua Tree の 30 周年を記念して U2 がツアーを開始した。

U2 のツアーはどれもユニークだ。この数十年、行ったツアーのひとつひとつに大金を投じてきた。ただ、過去の作品(30年前のアルバム、Joshua Tree)をリバイバルすることに関しては、スタッフを始めバンドすら手探りの状態であったという。

今回、U2 の FOH エンジニアを務める Joe O'Herlihy 氏にお話を伺った。

O'Herlihy: 本音を言えば、全員が不安を抱いていたと思います。U2 はいつも未来を見つめ、過去を振り返ることから逃げてきたバンドですから。しかし、この 30 周年記念のコンセプトを受け入れたファンが多かったことが背中を押してくれました。このリアクションは予想外で、関係者はみんな驚き、圧倒され喜んだと思います。

<過去を振り返って> #The Early Days

U2 メンバーと O'Herlihy 氏との間には長い歴史がある。1978 年 9 月、ダブリンの音響会社で働いていた O'Herlihy 氏は、大学で威勢のいい 4 ピースバンドのミキシングを担当した。このバンド、U2 のミキサーとしての歴史はこの日から始まった。ここでいう歴史の中には 1987 年に行われたオリジナルの『Joshua Tree』ツアーも含まれているが、テクノロジー的には今と全く違っていたのは言うまでもないだろう。

O'Herlihy: 振り返ってみて… 今こそ身近にある数々の音響機材ですが、当時は夢見ていただけだった、ということが大きな違いですね。

非常に悩んだ過去も否定しない。スタジオでのサウンドを正確にライブ環境(特に、前にも show をしたことがある難しいホッケー場や野球場)で再現することは、強靱な精神を持っていなければできなかった。今でもそれは変わらない。

O'Herlihy: いつも目標としているのは、ライブ中に放出されるアドレナリンを広めながら、スタジオでやっていることを再現し、その基準を維持することです。これは毎回の show における私の挑戦です。過去のテクノロジーは悪くなかったですよ。当時、手に入るベストの物でやってきましたから。ですが、その時バンドが要求することはひねりをきかせるのが多くて。演奏した会場ごとに試行錯誤していました。

U2 と O'Herlihy 氏は数々の会場を共にツアーで回った。

O'Herlihy: 出会ったときは彼らが 17、18 歳だったので、思えば長い道のりですね。

本当に長い。O'Herlihy 氏は U2 の前にはアイルランドのロックシンガー、Rory Gallagher を 5 年間担当していたという。また、REM や David Bowie、Stevie Nicks、そして The Cranberrie などとも仕事をしたことがあるそうだ。

O'Herlihy: こういったバンドのツアーで、音響スタッフ、その後モニターエンジニアや FOH エンジニアを務めるようになるにつれて、ロックンロールのミキシングとは何ぞやを学びました。

プロオーディオの最新機器を使い続けてきたことも彼の成功の鍵だろう。また、業界のデジタル化への動きも抵抗なく受け入れた。

O'Herlihy: 今は素晴らしいテクノロジーが指先に全てある時代です。古い言葉でいうと「準備して準備してまた準備」すれば、それを使って正確に測定された完璧な音を作ることが出来ます。

音響チームには特定の課題があった。このアルバムから数曲は常にコンサートのセットリストに入り、数曲はたまに入る。だが、ライブで演奏したことが一度もない曲が(少なくとも 1 曲)あった。

O'Herlihy: アルバムに忠実でありたかったので、こういった曲を活かすには準備が必要でした。私たちとしてはできる限りベストな方法で再現し、改善さえする必要がありました。

<数学の宿題> #Math Homework

Clair Global の Cohesion スピーカーシリーズを使うことは O'Herlihy 氏にとって喜びであった。

O'Herlihy: Cohesion は私も研究開発に加わった一番新しいテクノロジーです。他のアリーナツアーにも使用しましたが、何も欠けることなくそのまま再現できるところが気に入っています。音がいつも頭上に降り注がれるのです。私が 1 つ学んだのは、バンドにとって音がどこから来るのが快適か、それが自然であるのが重要なのだということです。

パワー/重量が小さくなることも必須でした。使用するビデオスクリーンは 245ft(74.7m)もあり、スピーカーシステムをその真ん中に吊るなんて、絶対に嫌でした！(笑) バンドの高い期待に応えるため、ラインアレイを 4 セット、トリムヘイト 53ft(16.2m)の所にカンチレバークレーンを使って配置しました。こういったことは 30 年前とは格段に違う方法です。今は全てが数学的ですよ。とても見事です。

仕事の多くは、ツアー初日前までにオフィスで出来てしまう。コンサート会場を PC 上でマッピングし、どのキャビネットをどこで使うか詳細を仕分ける。

O'Herlihy: 必要などころにアレイや、4 か所のディレイポジションを配置することが出来ます。とても具体的に、です。昔は推測ゲームみたいなものでしたが、今はツアー前の宿題をやっている感じですね。

彼は良い生徒なのであろう。ほぼ毎回、最初の音色から素晴らしいサウンドなのだから。ほぼと言ったのは、マイナー調整が必要なこともあった、というだけだ。

O'Herlihy: 大抵は手ごたえを感じますし、(サウンドチェックで)会場を歩き回る時にいい音を出していると嬉しいですね。

#### <ハウスにて> #At FOH

O'Herlihy 氏は DiGiCo 好きで、今回のツアーでは SD7 を使っている。ラックにはコンプレッサーやリバーブユニットが入っていた。ギターとベースにはチューブコンプ、Summit Audio DCL-200 を使用しているという。

O'Herlihy: これはオールドビンテージモデルなんですけど、とてもいい働きをしてくれます。Bono の声には Manley Labs VoxBox を使っています。これはインテリジェントで、Bono のサウンドにとってもいい影響をもたらします。

モニターにも全て SD7 を使っています。SD7 は 100% のリダント機能が卓に付いているのです。たくさんのメーカーはこの機能を軽視しますが、何か酷いことが起こったとき、例えば 1 パイントのバドワイザーが卓にこぼれたりしたのために(こんなことはまだ起こっていないし、起こそうとも思っていないですが)、卓にエンジンが 2 つ搭載されているのはいいことだと思います。こんな卓を排除することが本質的には保証になる、とは理解していますが、これはとても重要なのです。

彼が聞くサウンドの主要要素の一つとして、リードボーカルの透明度が挙げられる。ミックスのトップに Bono の声を大きくきかせる、というだけでは十分とは言えない。

O'Herlihy: 歌詞はメッセージです。客席に、大きく明瞭に届けなければなりません。U2 の音楽にとってそれはとても大切なことなので、私はミキサーとしてのキャリアをかけてそこに集中してきました。ただ、年月が経つごとに、卓の機能を使うことは(増えるのではなく)減っていきました。不思議ですが、Bono の声は、歳をとることに抗うようにだんだん良くなっていったのです。これには全員が驚かされました。十分にケアもしているようでしたし、マイクを使うテクニックも良くなっていきました(笑) show の日はいつも Bono に言いました。「君がマイクに歌えば、私は君自身の声を会場に届けられる。他人のように歌うな、歌おうとするな。」とね。

ボーカルマイクは主に Shure SM58 で、The Edge は Shure 54 ヘッドセットを使っている。ギターは全て 58 と 57 である。キックは SM91 と SM52、スネアボトムに SM57、タムに AKG451 と Sennheiser421 で、ドラムに関しては何年も変わっていないと言う。

システムテクノロジーが向上する中で、仕事は難しくなっていく。より責任重大になって、楽なことはないし、様々なことが複雑になっている、と彼は不平を言わずに語った。

#### <システムのアプローチ> #The Systems Approach

U2 のサウンドを数十年もサポートしているという Clair は今回のツアーにも Joel Merrill 氏と Jo Ravitch 氏を派遣した。Merrill 氏が初めてこの業界で働きだしたのは 2006 年、2 名のスタッフのうちの 1 人としてバンとトレーラーで各地を回るスタイルのツアーを担当した。そこから 2 年の経験を積み、2008 年に Clair に加わった。その後、Dream Theater や 3 Doors Down、The Eagles、Justin Bieber、Paul McCartney などの仕事をして、2009 年に初めて U2 ツアーに携わった。Ravitch 氏はと言うと、Stony Brook の NY 州立大学に通っていた 1979 年 3 月に Clair のギグに参加したことで A / V エキスパートとしての道を見出し、この仕事を始めた。The Bee Gees や Elton John、Hall and Oats、REM、Todd Rundgren、The Grateful Dead、Rush、The Rolling Stones など様々な仕事をこなした。最初に U2 ツアーに携わったのは 1984 年で、それからほぼずっと関わっている。

Ravitch 氏が言うには、この show は 360 ツアー(音響機材だけでトラック 11 台。内部にビデオファンネルが組み込まれた巨大な爪型ステージは言うまでもない)と比べるとかなり規模が小さく、トラック 3 台まで縮小されているという。音響スタッフは 11 名、その中にモニターエンジニアが 3 名含まれている。

Ravitch: この show のミーティングは昨年、Stufish Designs の Willie Williams 氏、Ric Lipson 氏によるステージデザインのプレゼンから始まりました。デザインスタッフはプロマネの Jake Berry や実際に形にする Tait Towers と数々のミーティングを重ね、ツアーを物理的にデザイン、プランニングしていきました。その後、デザインが最終段階に入ると、StageCo が加わり、Clair Global の CO12、CO-8、CP218 で構成された 4 か所のメイン PA や巨大なスクリーンを支えられる完璧な構造計画のプレゼンが始まりました。

Merrill: ツアーのステージプランニングにおける私の主な仕事は物流管理です。Jo (Ravitch) が show デザイナーや制作とシステムの詳細を詰めていく中で、私はシステムを shop から動かせる状態にして最初のロードインに備えるのです。ツアーではPAシステムとFOHのロードイン、ロードアウトを担当しています。システムを入れるのにかかる時間は約6時間です。ステージを形にしている途中で、PA に繋ぐケーブルを客の目線を遮らぬようビデオウォールの上を這わす必要があるのですが、それをするためだけに登るスタッフが2人x2チームいます。ロードインにしてはとても珍しい方法だと思います。

彼らが最初にステージを組んだのはヒューストンの NRG スタジアムだった。

Merrill: そこでは10日かけて、システムを完全にチューニングするなど show の技術的観点だけにフォーカスを絞りました。ヒューストンの後はバンクーバーの BC Place に移動し、バンドと共にフルで制作リハーサルを行いました。Show 初日前の2週間はそこで過ごしました。

このフォーピースバンドにはモニターエンジニアが3人いる。1人は Larry Mullen と Adam Clayton 担当、1人は The Edge、1人は Bono に付いている。

Ravich: 時が経つにつれ、スタジオでの活動に重点を置いて個人個人をミックスする非常に特殊なスタイルに慣れていきました。show においてもスタジオの質を反映させたイヤモニミックスを要求するようになったのです。ライブ show の状況下で個々の要求が多岐に及ぶようになると、もちろんモニターエンジニア1人だけでは対応できなくなってしまったので、3人でちょうどいいのです。

Merrill: みんな素晴らしいスタッフばかりです。ベストだと思う show を毎回全員で作り上げています。

U2 Joshua Tree Tour 2017 AUDIO CREW Sound Company: Clair Global FOH Engineer: Joe O'Herlihy Monitor Engineers: Alastair McMillan (Bono); Richard Rainey (The Edge); CJ Eiriksson (Adam Clayton, Larry Mullen Jr.) System Engineers: Jo Ravitch, Joel Merrill, Tim Peeling Monitor/RF Technician: Niall Slevin Monitor/Stage Technician: Brandon Schuette Pro Tools Engineer: Mike LaCroix P.A. Techs: Pascal Harlaut, Hannes Dander, Anne Butte Guitar Tech (The Edge): Dallas Schoo	GEAR P.A. GEAR Main: Two Clair Cohesion clusters, each with (16) CO-12's  Side Hangs: Two clusters, each with (16) CO-12's Upstage Side (270°) Hangs: Two, each with (4) CO-12's  Subwoofers: (30) Clair self-powered CP 218's, ground-stacked 15/side in a steered, cardioid configuration.  Delay Towers: Four, each with (8) CO-12's  Front Fills: (20) Clair CO-8 across edge of stage.  Amplifiers: Lab.gruppen PLM+	FOH GEAR FOH Console: DiGiCo SD7 Outboard: (2) Manley Labs VoxBox; (2) Avalon 747 preamps; Eventide H3500 UltraHarmonizer; Yamaha SPX1000 reverb; (2) TC 2290 Delay/Effects; (2) Summit DCL-200 compressors  MON GEAR Monitor Consoles: (3) DiGiCo SD7 Outboard Gear: (4) Neve 1073 preamps, (6) Empirical Labs Distressors; (4) TC 1128 programmable graphic EQs  Mics (partial): Shure SM58 most vocals, Shure 54 headset (The Edge vocal) guitar amps: Shure SM58s and 57s. Drums: kick, Shure SM91/SM52; snare, SM57 top/bottom; hi-hat, AKG C451B; toms, Sennheiser MD421's
---	---	--